

明るい未来と息苦しさを提供します

作 山口茜

場所 とある地方の公民館の会議室3

日時 3月のとある日曜日の夕方5時ごろ。

合唱グループフレンドリー とあるNPO法人が運営する合唱グループ。大学で合唱クラブに入っていた設楽が中心となって活動している。他のメンバーは基本的に募集して集まってきた人たち。

登場人物

設楽・・・40代、バイト フレンドリーのリーダー
豊田・・・30代、公務員 フレンドリーメンバー
稲沢・・・30代、公務員 フレンドリーメンバー
半田・・・50代、中小企業の社長 フレンドリーメンバー
瀬戸・・・30代、介護施設勤務 最近入った新しいフレンドリーメンバー
三好・・・20代、実家暮らし フレンドリーメンバー

会議室。舞台上はいくつかの長机とパイプ椅子。出演者が出てくる。それぞれ長机の上に着脱いだりカバンをおいたりする。

設楽「じゃあ始めます」

出演者たちは楽譜を持って設楽の周りに集まる。

出演者たちは設楽の指揮で合唱が始まる。

うらわし きみのめ こころにおなぬ
ふれあうのは まだみぬ ぬくもりのため
らしか あのぬちやけに 井と井のわいのめした
おむせむすうすうすうすうすうすうすう ぬたごころ しみたとめた

歌の途中で、奥から半田が人形を持ってまっすぐ静かに歩いてくる。

半田は指定の場所で立ち止まり、豊田を見る。

豊田の目配せの指示通り、人形を机に置く。

そして自分も長机の上に座ろうとする。

設楽「あー」

半田「？」

設楽「それ、・・・机なんで、あの・・・強くないんで、そんなに」

稲沢「豊田くん」

半田「そうなの」

設楽「はい」

豊田が急いでパイプ椅子を2脚、持ってくる。

豊田「どうぞ」

半田はパイプ椅子に座る。

豊田「では、記念写真を撮らせていただきます」

半田を中心に写真撮影。

豊田「じゃ、皆様しばらく、ご歓談ください」

設楽「ていう感じで、進められたらと思います。うん、いい気がする。じゃみんな
で準備、入りましょうか」

半田「（人形を）これどうしよ、どっか、邪魔にならないところに」

豊田「あ、じゃあ」

設楽「え、なんですか」

豊田「・・・」

設楽「なんですか邪魔にならないところって」

半田「いや、どっか、邪魔にならないところに」

設楽「うんだから邪魔にならないところってなんですか」

稲沢 「大丈夫大丈夫、こっちでなんか、あったかいところ探しましょ」

設楽 「え？何」

稲沢 「寒そうだからなんか、私冷え性なんですって」

設楽 「ん？」

稲沢 「冷え性なんでーすって、聞こえませんか？」

豊田 「（稲沢に）行こう」

稲沢 「寒いよー、寒いよーって」

豊田 「ちよっと、買い出し行ってきました」

稲沢は人形を持ち豊田とともに出ていく。三好が袋の中をのぞいて

三好 「あ、何これ」

瀬戸 「悔しい」

三好 「なんですか」

瀬戸 「生クリームが途中で足りなくなっちゃって」

三好 「あ、ケーキですかこれ」

瀬戸はケーキを持って出ていきながら

瀬戸 「あー悔しい」

三好 「ん？」

瀬戸 「後で見たらわかる」

三好 「はあ」

瀬戸 「あーあ、あとちよっとだったんだけどな」

瀬戸は出ていく。

半田 「6時からだよね？」

三好 「はい」

半田 「あー緊張するななんか。設楽さんは、いないの相手」

設楽「え？」

半田「相手。新しいの。いるんでしょ誰か」

設楽「・・・」

半田「トイレ行つところかな、今の間に」

半田は出ていく。瀬戸が戻ってくる。

瀬戸「あ、そっか！最初から三つ買つとくべきだったんだ、生クリーム」

三好「(笑う)」

瀬戸「なんとかいちごで誤魔化したけど、本当は生クリームたっぷりのところにイチゴをぶちゅって置くのがいいんだよねえ、ねえ？」

三好「最近高くないっすかいちご」

瀬戸「若者にはねえ」

三好「そんな、え、高くないすか？」

瀬戸「私は大人だから」

設楽「高い高い」

三好「ですよね？」

瀬戸「あー悔しい」

三好「あれ、半田さん、人形、なんですかあれ」

設楽「一人はなんか雰囲気出ないからなんかないかって」

三好「お相手さんは？」

設楽「知らない、まだきてないんじゃない」

三好「なんか半田さん、さっきめっちゃめっちゃ失礼なこと言っていましたよね、設楽さんに」

瀬戸「ん？」

設楽「別にいいんだけどね」

三好「えーでもあの聞き方はなんか、雑だなあと思いましたけど」

設楽 「自分が結婚するからお花畑になってんだよね頭が」

瀬戸 「ん？」

三好 「(瀬戸に) 相手いないのって設楽さんに」

瀬戸 「え、でもあれですよ、設楽さん」

設楽 「え？」

瀬戸 「あれ、違いましたっけ？」

三好 「なんすかなんすか」

瀬戸 「すごい、二人で仲良く、歩いてませんでした」

設楽 「誰と？あ、やばい、えっと私たち3人は研修室の飾り付けだよ」

三好 「はい」

設楽 「あと1時間しかない」

三好 「えーもうそんな時間」

設楽 「・・・あれ、のり・・・あっちにおいたかな私」

設楽は出ていく。三好も立ち上がる。

瀬戸 「え、なんか怪しくなかった今の」

三好 「ん？」

瀬戸 「絶対なんかあるよあれ」

三好 「誰とですか？」

瀬戸 「えっとー豊田さん」

三好 「え、豊田さん？は、稲沢さんと結婚してますよ」

瀬戸 「ええ？」

三好 「はい、子供もいるし」

瀬戸 「そうなの？」

三好 「別にメンバーだから、仲はいいですけどね」

瀬戸「なんだ、そうなんだ」

三好歩き出す。

瀬戸「ねえねえ、今日もなんか終わったら用事あるの」

三好「え、今日ですか、えーっと・・・」

半田が戻ってくる。

三好「なんか持ってくもありませんでしたっけ」

瀬戸「いや、大丈夫じゃない、全部設楽さんが準備するって言ってたから」

三好「あ・・・じゃちょっと準備してきまーす」

三好、瀬戸、出ていく。一人になった半田は、少しそわそわし始める。

半田「あー・・・」

半田は緊張しているようだ。そこに設楽が入ってくる。設楽は部屋に立ち入った瞬間、立ち止まる。

設楽「あれ私何しに戻ってきたんだっけ・・・えっと・・・え、まじで思い出せないんだけど・・・」

半田「・・・」

設楽「・・・」

半田「そろそろ？出発」

設楽「え？」

半田「6時からでしょ？」

設楽「ああ、そうです、6時から」

半田「じゃそろそろ・・・だよな？」

設楽「あそうだこれ」

半田「何？」

設楽「これ（と花を見せて半田の胸ポケットに）・・・いいですね」

半田「それをやりに来たんだ」

設楽「違うんですよ」

半田「違うの」

設楽「違うんですよえ、これはついでなんです」

半田「ついで」

設楽「なんか、ここに帰ってしなくちゃいけないことがあって、そのついでにこの花を半田さんの胸ポケットに刺したら可愛いんじゃないかなって思って持ってきたんだけど・・・それは今終わって・・・えーっともうほんとなんだっけ、いやんなっちゃう、年だなあ」

半田はあまり設楽の話を聞かずソワソワしている。設楽はそんな半田を見る。

半田「何」

設楽「なんか新鮮ですね、半田さんのそんな感じ、本当、おめでとうございます」

半田「弁護士の試験がね、もうすぐなんだよ」

設楽「弁護士の試験？」

半田「今の仕事がさ、ほら、なかなか、潰しが効かないでしょ」

設楽「へえ、そうなんですか」

半田「いやあ効かないんだよ、だからちよっと、一念発起してね」

設楽「え、そういうお仕事でしたっけ」

半田「そういうって」

設楽「弁護士となんか、関わりあるような」

半田「全然。製造業」

設楽「ですよええ」

半田「ま、全然っていうか、弁護士はどんな職業とも関係しようと思っただら関係するからね」

設楽「やっぱ結婚も、影響してるんですか」

半田「うん、まあそうでもない」

設楽「あれ」

半田「実際、結婚自体、まだ迷ってるところもあるぐらいだから」

設楽「え？」

半田「・・・」

設楽「え、迷ってるんですか？」

半田「んー」

設楽「今から結婚式ですよ」

半田「だよな」

設楽「ええ？」

半田「ふふふ、ごめん」

設楽「私に謝られても」

半田「あーいよいよ俺も年貢の納め時かーって言うね、あるじゃん、そういうの」

設楽「ネングノオサメドキ」

瀬戸が入ってくる。

瀬戸「あれ、設楽さん百均は？」

設楽「・・・」

瀬戸「百均。のり」

設楽「ああ！それだ」

設楽は自分の上着の置いてあったところまで来て上着のポケットからレシートを取り出す。

設楽「これこれ、見てこれ（と瀬戸に）。300円」

瀬戸「はあ」

設楽「百均だよこれ」

瀬戸「おお・・・」

設楽「（半田にも）ザル買ったんですよ百均で、そしたらなんか家帰ってレシート見たら300円ってなって、え、私百均来たのになんで300円みたいなの」

瀬戸 「(自分の鞆からハサミを取り出しながら) あー」

設楽 「だから返品してやろうと思って、持ち歩いてるんですよ、これ・・・ざる・・・あれ、ざるが・・・な、い、と、ん?・・・」

瀬戸 「私行ってきましたよ、百均」

設楽 「・・・」

瀬戸 「雨降りそうだし、早く行ったほうが」

設楽 「いやいやいやいや、私が行きます、ごめんなさい、なんか、ないんだよね、ざるが」

瀬戸 「いえいえ、でも、できたら私、いかせてください」

設楽 「へ?」

瀬戸 「お願いします」

設楽 「いやいやいやいや、ごめん、ほんとごめん・・・え、なんで?なんでないの、入れたのに、え?ごめんなさい」

瀬戸 「本当に、私が行きますから」

設楽 「(半田に) 大変なんですよ、瀬戸さんも、ね、」

瀬戸 「え」

設楽 「ほら、職場の・・・上司の方が・・・」

瀬戸 「・・・」

設楽 「言ってたじゃない、ほら、なんか、無茶振りするんだよね、現場のこと何も知らないくせに。それで皺寄せがみんな瀬戸さんに来て」

瀬戸 「ありました、ざる」

設楽 「んーなんでだろ、ここに入れたはずなんだけどなあ」

瀬戸 「私、行ってきます。三好さんにこれ渡しといてください (とハサミを取り出し)」

設楽 「いいよ私が」

瀬戸 「すぐ戻ってきますんで」

設楽 「えー、ちょっと」

瀬戸 「三好さん、よろしくお願いします」

瀬戸は出ていく。

設楽 「えー？」

半田 「大丈夫かな」

設楽 「ま、大丈夫は大丈夫でしょうけど」

半田 「・・・」

設楽 「ここから歩いて10分なんですよ、百均」

半田 「いや、そうじゃなくて」

設楽 「ん？」

半田 「俺が、結婚なんかして」

設楽 「・・・ん？」

半田 「怒ってないかな」

設楽 「誰が？」

半田 「瀬戸さん」

設楽 「・・・」

半田 「知らない？」

設楽 「知らないです」

半田 「色々あったんだよね」

設楽 「・・・」

半田 「一回、飲みに行こうって誘って。LINE交換して、何回か、ラインのやり取りがあって・・・すごい、悩んだんだけど、お互い、でも、結局いかなかったんだよね。それで、今日という日を迎えてしまった俺たちは、っていう・・・あ
ー・・・ま、やめようこの話は。そろそろ出発だろうから」

設楽 「・・・」

半田「・・・？」

設楽「出発ってなんですか」

半田「え、その、会場に」

設楽「会場？」

半田「結婚式の会場」

設楽「結婚式の会場はここです」

半田「・・・いや、じゃなくて、俺の結婚式の」

設楽「会場はここです」

半田「・・・え？」

設楽「ま、ここってというか、研修室」

半田「研修室？」

設楽「ここ、流石にここちょっとほら、会議室って感じが強いから、結婚式には合わないねってなって、あ、研修室って行ったことあります、後で、一人で来てもらわないといけないから・・・ここで、右の方にずっと歩いて行ったら階段があるじゃないですか」

半田「いや、そういう、違う違う」

設楽「ん？」

半田「俺の結婚式、ここでやるの？」

設楽「だから研修室」

半田「違う」

設楽「ん??？」

半田「え、何、この建物でやるの？」

設楽「はい」

半田「この男女参画、なんとかセンターで？」

設楽「はい、なので今、しつらえといふかなんか、華やかな感じにした方がいいかなと思ってみんなで、飾り付けを」

半田「・・・」

設楽「これちよっと、三好さんに渡してきますね」

半田「ちよ、ちよっと待って。なんかテンション上がらないな、ここだと・・・ごめんねなんかこんなこと言って、あれだけど、でもやっぱここで結婚式は、ないわ、だってほら、場所って大事じゃない、いわばハレの日な訳でさ、結婚式ついていうのは、それをこんな、ちよっと廊下とかトイレの匂いするでしょう、そんな場所で、え、ビックリとかじゃなくて？」

設楽「ビックリ」

半田「ビックリさせるやつ、なんか、騙して」

設楽「ドッキリ？」

半田「それ」

設楽「ではないですね」

豊田が入ってくる。よそ行きの格好で、手にはケーキや、飲み物や、お菓子の入った買い物袋を下げている。部屋に入って少し驚く。

豊田「あれ？」

設楽「研修室です」

豊田「あ、」

設楽「(微笑む)」

一度出ていくが戻って

豊田「どこでしたっけ、研修室って」

設楽「行きます、一緒に」

豊田「(半田に) すいません、もうちよっとなんで」

半田「おう」

二人は出ていきながら

(声) 豊田「雨降ってきました」

(声) 設楽「あ、だからちよっと濡れてるんだ」

(声) 豊田「え？」

(声) 設楽「ここ・・・」

しばらくの間。

瀬戸が入ってくる。少し髪や服が濡れている。

ノロノロと自分の鞆のところに行って、鞆を探る。

半田は椅子に座り、ハンカチをポケットから取り出して瀬戸に見せる。

半田「どうぞ」

瀬戸「あ、大丈夫です」

半田「でも」

瀬戸「本当に本当に」

半田「いけた？百均」

瀬戸「(と折り畳み傘を取り出す)今から行ってきます」

半田「送ってこう」

瀬戸「いやいやいや」

半田「雨だから」

瀬戸「すぐそこなんで」

半田「なんか」

瀬戸「・・・」

半田「なんか、こうなる前に」

瀬戸「・・・」

半田「ね」

瀬戸「・・・？」

半田「行けたらよかったんだけど本当は」

瀬戸「・・・ああ・・・ま、でもだいたい前から雲行き怪しいなと思ってたんで」

半田「・・・え？」

瀬戸「怪しかったですよ、3時ぐらいから」

半田「3時？」

瀬戸「むしろこうなるのわかったのになんでって感じで」

半田「わかってたって？」

瀬戸「だから」

半田「分かってたってなにを？」

瀬戸「だから、雲行きが怪しいってことを」

半田「確かに・・・俺もすんなり諦めてしまったのは良くなかったなと思ってる」

瀬戸「え？」

半田「はつきりさせなかったのは、確かに、俺の責任だと思う」

瀬戸「・・・」

半田「・・・」

瀬戸「でも天気は誰にも、読めませんから」

半田「・・・うん」

瀬戸「だいたい、設楽さんなんですよ、忘れたのは」

半田「設楽さん？」

瀬戸「折り紙持ってくるねって言ったのも、のり持ってくるねって言ったのも、設楽さんなんです、で忘れたのに気がついたのがこのタイミングで、それで慌てて買いに行くことになっちゃって・・・それなのにここにきたら喋ってるし二人で」

半田「いや、あれは違うんだよ、向こうが一方的に」

瀬戸「ごめんなさい、とりあえず行ってきます、早くしないと始まっちゃうから」

半田はいつの間にか瀬戸に近づいており、ハンカチで瀬戸の髪の毛をゆっくり拭き始める。

半田「全部、ハイって答えてね」

瀬戸「え？」

半田「ハイ」

瀬戸「はい」

半田「今日は、雨だね」

瀬戸「はい」

半田「俺の結婚式、もう直ぐ始まるね」

瀬戸「はい」

半田「終わったら、家に行っていていい？」

瀬戸「・・・」

半田「はいは？」

瀬戸「・・・」

半田「はい」

瀬戸「・・・」

半田「はい・・・は？」

豊田が入ってくる。

半田「はい、は？」

豊田「ん？」

半田「ハイ、ワ！ハイ、ワ！」

半田は出ていく。続いて稲沢、三好が入ってくる。

稲沢「あれ」

三好「瀬戸さん」

瀬戸「ごめんなさい、ちょっと行ってきます」

稲沢「百均？」

瀬戸「はい」

稲沢 「あれ、でもなんかもう大丈夫って言ってなかった？」

三好 「あ、大丈夫です」

稲沢 「あるものでなんとか間に合ったって」

瀬戸 「のりも？」

三好 「はい、足りなかったところ、ホッチキスで全部くっつけちゃったんで」

瀬戸 「あ、そうなんだ」

豊田 「じゃ瀬戸さんも、ちょっと入ってもらおう」

稲沢 「うん。座って。三好くんも」

稲沢、豊田、瀬戸は椅子に座る。少し離れて、三好が座る。

豊田 「(瀬戸に)ちなみに半田さんってどこ行ったんですか」

瀬戸 「さあ・・・」

豊田 「なんか、喋ってませんでした、今」

瀬戸 「あ、天気の話を」

豊田 「天気の話？」

瀬戸 「はい・・・いつ頃から、雲行きが怪しかったかと言うようなことを」

豊田 「ああ」

瀬戸 「はい」

稲沢 「あのさ瀬戸さん、前に、結婚したいって言ってたよね」

瀬戸 「はあ」

稲沢 「今も、その気持ちに変わりはない」

瀬戸 「うーん、まあ、そうですね・・・」

豊田 「相手がもういる、とか？」

瀬戸 「いやっ・・・まあ、いないというか、はい、まだそういうのは」

稲沢 「うーん、すごい失礼なこと承知で言うんだけど、半田さんってどう？」

瀬戸「・・・え？」

豊田「ちょ、ちょ、それはちよっといきなりすぎるわ」

稲沢「しょうがないじゃん、時間ないんだから」

豊田「そうだけど、まずは順を追って話さない」と

稲沢「順ってなにやもう、そもそもこの話自体無茶苦茶なんだから」

豊田「ちょちょちょ落ち着いて落ち着いて」

稲沢「落ち着いてます私は。なにそれ。え、何今の」

豊田「ごめんごめん」

瀬戸「・・・」

豊田「ごめんね・・・なんかこの間の飲みの席で、半田さんの結婚式をみんなでやろうって話になったじゃないですか、こないだ、あれ、瀬戸さんいましたっけ」

瀬戸「はい、いました」

豊田「あの時、半田さんが、最初に結婚式がしたい、って言ったんですよ」

瀬戸「はい、聞いてました」

豊田「ですよ、結婚式を本当は挙げたいんだけど、挙げる予定がないんだって言うから」

瀬戸「はい」

豊田「それだったらフレンドリーのみんな、手作りになっちゃうけど、やりますよって、誰が言ったんだっけあれ」

稲沢「あなたでしょ」

豊田「え、言っていないよ僕は」

稲沢「あなただよ、ねえ（瀬戸さんに）」

瀬戸「あーどうだったっけ・・・」

豊田「まあいいや、誰が言い出したのかは忘れちゃったけど、で、みんなもそうしようってなりましたよね？それはなったよね」

瀬戸「はい、私は、一曲そのために何か練習してみんなで歌いましょうって」

豊田「言った言った」

三好「設楽さんじゃないですか、結婚式しましょうって言ったの」

豊田「あ、そうだ設楽さんだ。それで、僕がいいですねって言ったんです」

稲沢「そうだ、嬉しそうに賛同してたわあの時」

豊田「別にうれ・・・もう・・・それで、まず、ここをおさえて、式次第？誰がどこで挨拶するかとか、余興とかね、飾り付けの買い出しとか、ケーキどうするか、そういうのを全部、みんなで頑張ってきたじゃないですか、それで今日になって、全部揃ったと思ったら、一つ、肝心なことを確認し忘れてたってことに気がついたので」

三好「確認？」

瀬戸「なんですか」

豊田「・・・」

瀬戸「あ、もしかして」

豊田「・・・」

瀬戸「色紙？」

稲沢「ほんとだ、色紙、忘れてたわ」

瀬戸「ですよ、私、あの時それも提案して、稲沢さんすごいいいねって言うてくれて」

稲沢「え、そうだったっけ、ごめん、忘れてた」

瀬戸「いえいえ、もしあれだったら私、今から買いに」

豊田「瀬戸さん。ごめん、ちょっと待って」

瀬戸「はい？」

豊田「色紙じゃないんですよ」

瀬戸「あ・・・」

三好「わかった、ビデオカメラ？」

豊田「違う」

瀬戸 「はいはい、ブーケですか」

豊田 「ものじゃないんです」

瀬戸 「ものじゃないってことは、あ、司会進行の人！」

三好 「それは設楽さんがやるんじゃないかった、あ、わかった、神父さん」

瀬戸 「ドレスの後ろ持つ人とか」

豊田 「ごめん、ちょっと、ごめん、これ、当ててほしいわけじゃないですよ」

瀬戸 「あ・・・」

三好 「すみません」

豊田 「いや、」

瀬戸 「わかった、カメラ立てるやつ」

三好 「ああ、三脚？」

瀬戸 「そうそう、三脚」

設楽が傘とお菓子の入った袋を持って入ってくる。

設楽 「あれ、みんなここいたんだ」

設楽はみんなの座った場所に近い机に、お菓子を置く。

設楽 「これ、よかったら食べて」

三好 「うわー・・・」

設楽 「なんか買いきすぎちゃって、テーブルの上に乗らないのよ」

豊田 「ええ？」

設楽 「なんかケーキだけだとあれかなと思って・・・ああもうほんと助けてよ半田さんもう」

三好 「どうしたんですか」

設楽 「嫌なんだって、ここで結婚式をやるの」

三好 「ええ・・・？」

設楽 「でもさあ、今から別の場所おさえるの無理でしょ？」

瀬戸「ああ！（豊田に）ここでやるっていうのを、半田さんに確認とってなかったんですか」

設楽「そうそう、びっくりさせたいと思ってたからさあ、そしたらありえないって言われて、こんなところでやるなんてって」

豊田「設楽さん」

設楽「言っとくけど研修室ってすごい倍率なんだよ、稲沢さん知ってるよね、朝9時から並んで」

稲沢「はい」

設楽「もう最悪なのよ、1分遅いだけで1年間一度も研修室取れないとか普通にありもん、ねえ？」

稲沢「はい」

設楽「それをあの人は全然わかってないのにそういうこと言うから」

豊田「設楽さん、ちょっといいですか・・・違うんです」

設楽「ん？」

豊田「違うんです、そういうことじゃないんです」

設楽「何が？」

豊田「もつと、やばいことになってるんです」

設楽「何？」

豊田「相手が・・・いないんです」

設楽「・・・相手って？」

三好「え！？」

設楽「え、何？」

瀬戸「ええ・・・！？」

豊田「今日の結婚式、半田さんの結婚相手を準備するの、忘れてたんですよ」

設楽「・・・いや、はあ？」

豊田「・・・」

設楽 「いやいやいやいや、そこは半田さんが連れてくるんじゃないの？」

豊田 「確認しました。一人で来たそうです」

設楽 「後から遅れてくるとかじゃなくて」

豊田 「さつき廊下で会ったとき・・・歌を詠んでくれました」

設楽 「歌？」

豊田 「行きは一人できた道を、帰りは二人で帰るのかって」

三好 「呑気だな半田さん」

設楽 「え、ちょっと待って、結婚式を挙げたいっていう話だったよね」

豊田 「僕も、はい、そういう認識です」

設楽 「出会いが欲しいとか、相手を探してるとかじゃなくて」

豊田 「式を挙げたいって、言いました」

設楽 「言ったよねえ」

豊田 「でもまさか・・・相手がいないとは・・・」

設楽 「ちょっと信じられない」

稲沢 「いやでもそこは確認すべきだったと思うんですよ私」

設楽 「何を？」

稲沢 「相手の有無を」

豊田 「だけどお相手はいらっしゃるんですかって失礼だろそれは」

稲沢 「だけど一番大事なポイントじゃん」

設楽 「まあ、それはそうだよね」

稲沢 「私は思っていましたよ、正直、相手いないんじゃないのかなって」

豊田 「じゃなんで言ってくれなかったの」

稲沢 「言えなかったの」

豊田 「・・・」

稲沢 「あの人・・・なんか言えないんだよね」

三好 「なんかってなんですか」

設楽 「なんか。だいたい、会社してるでしょあの人」

三好 「え？社長ってことですか？」

瀬戸 「知らなかったの？」

稲沢 「で、出会いはいっぱいあるはずなんだよ。あるはずなのに、あえてこのサークルで、結婚式がしたいって言ったんだよ、こんな、田舎の、有志が集まった合唱サークルの飲み会で」

三好 「はあ」

稲沢 「つまりさ、職場にはそういう相手がいないってわけ。で、今あるでしょなんか、アプリとか、そういうのもきつと、ダメだったんだろうね。それで、ここにきたわけ。あの中は。それにままと、私たちがはめられたんだよ」

豊田 「その言い方はちょっとないんじゃないかな」

三好 「ってことは半田さん、この中の誰かと結婚するつもりってことですか」

稲沢 「やめて気持ち悪い」

三好 「でもそういうことだよ」

瀬戸 「私には、歌が好きで入ったって言ってましたよ、半田さん」

稲沢 「人間だったらだいたい好きでしょ歌なんて誰だって」

瀬戸 「そうですけど」

豊田 「ちょ、ちょ、落ち着いて本当に」

稲沢 「落ち着いてます私は。何遍も言わないでそう言うこと」

設楽 「自分も多分、自覚してないんだよね」

三好 「・・・」

設楽 「自分では本気で歌を歌いたいと思って入ったんだけど、実際は出会いを求めていたっていう深層心理？気が付いてないんだと思うわそれは」

稲沢 「深層心理っていうか、それしかないですよ」

設楽「そんな、さすがにでも、明確に相手を探そうとまでは思ってたんじゃないかなあ」

豊田「ですよ、逆に社会的な立場のある人だからこそ、その辺は節度を持って」

稲沢「じゃなんで今日一人できた？」

豊田「・・・」

稲沢「なんで誰にも相手のことを話題に出さず、聞かず、今日までいられた？」

豊田「・・・知らないけど」

稲沢「確信犯なんだよ。あの人は、私たちに結婚相手を用意させるために、ここに入ったの。そして今日を迎えた」

豊田「まあ、だったとして、どうする」

稲沢「・・・」

豊田「とりあえず、今日の結婚式は、なんとか体裁を整えないと」

三好「(窓から下の公園を眺めて)あ・・・」

設楽「え？」

設楽と瀬戸、窓に近づき下を見る。

三好「半田さん・・・」

瀬戸「本当だ」

三好「何してんだろ、あんなところで」

瀬戸「・・・」

三好「本当にこのメンバーなら誰でもいいって思ってたのかな・・・」

瀬戸「・・・」

三好「自分だったら、無理すね・・・そもそも結婚が無理だけど」

瀬戸「・・・」

設楽「まあいいよ、しょうがない。今回はお互い様だわ。向こうも、私たちも、確認不足だった。事実はそのだけでしょ」

豊田 「ですね」

設楽 「よし、今日は中止にしよう」

稲沢・瀬戸 「え？」

設楽 「事情説明してくるわ」

豊田 「いや、それはちょっと待ってください」

設楽 「え？」

豊田 「ちょ、ちょ、ちょっと」

設楽 「・・・」

豊田 「もうちょっと、考えませんか、なんか」

設楽 「なんかって」

豊田 「なんか、なんとかして、結婚式を挙げられる方法を」

設楽 「・・・ん？」

豊田 「だって、もう、ここまで準備したんですから」

設楽 「ごめんちょっと意味がわからない」

豊田 「だから・・・」

設楽 「・・・」

豊田 「僕、約束しちゃったんです、半田さんに。いい結婚式にしますって」

設楽 「何でそれを豊田くんが約束するのよ」

稲沢 「なんでダメなんですか？逆に」

設楽 「・・・」

稲沢 「で、さっきの話に戻るわけなんだけど」

瀬戸 「あー・・・」

稲沢 「どう」

瀬戸 「・・・無理・・・かな・・・」

稲沢 「だよねえ・・・」

設楽 「何？」

稲沢 「でもさ、瀬戸さん、残酷だけどはっきり言うよ。結婚なんて誰としたって同じ」

設楽 「ねえねえ」

稲沢 「好きで結婚したってことがだんだん信じられなくなってくるの」

豊田 「ちょっと」

稲沢 「相手にもう興味が無いのに子供がいるから別れられなかったりもする」

豊田 「やめよう」

稲沢 「・・・」

豊田 「やめよう、無理強いするのは良くない」

稲沢 「じゃどうするの半田さん、相手がい無いのに、結婚式なんてできないですよ」

設楽 「ちょっと待って。二人とも。瀬戸さんに何頼んだの」

豊田・稲沢 「・・・」

設楽 「変だよ、何もかも」

稲沢 「じゃ自分は変じゃないって言いたいんですか」

設楽 「・・・」

稲沢 「ね、教えてください、何が変で、何が変じゃないんですか」

三好 「はいはいはいはい！結婚相談所の、リストを渡すってのどうですか」

稲沢 「リスト？」

三好 「この辺の地域の相談所をおすすめ順にリストアップして、それにこう、リボンつけて、頑張ってるって」

稲沢 「・・・」

豊田 「ちょっと考えられないなそれは」

三好 「すいません」

稲沢 「とりあえず、誰か、人がいるよね」

豊田 「うん」

稲沢 「探さなきゃ、今からでも。開始時間、送らせてもらって」

三好 「あ、はいはい！」

豊田 「・・・」

三好 「今、うちの近所で、結婚したいっていつてる人がいるんですよ、呼べば来るんじゃないかなあって思うんですけど、今からでも」

稲沢 「どこ住んでるんだっけ、三好くんって」

三好 「近所です、ここから歩いて10分ぐらい」

稲沢 「呼べるじゃん」

三好 「ちよつと、聞いてきましようか」

豊田 「待って、その人何歳」

三好 「50代・・・60代ではないと思うんですけど」

豊田 「・・・」

稲沢 「何」

豊田 「それだったら結婚相談所に行ってっていうのと同じだなと思って」

稲沢 「え？」

設楽 「どういうこと？」

豊田 「瀬戸さん、お願い。とりあえず、式だけでもあげてくれないかな。そのあとは、僕がなんとかするから」

瀬戸 「なんとか？」

稲沢 「ね、何今の。なんで50代だったらダメなの？」

豊田 「いや、ダメではないけど」

設楽 「豊田くん、もしかして半田さんになんか弱みとか握られてるの？」

豊田「ええ？」

設楽「結婚式を挙げないと、なんか困ったことになるわけ？」

豊田「や、そんなことはないですけど別に」

設楽「じゃあやめようよ、大丈夫だよ、ごめんなさいって言えばいい。勘違いしてたよねお互いって、言えばいい。そんな、ここにいない人まで蔑むようなことはやめようよ」

豊田「え、ここにいない人って、え、」

稲沢「だから今、50代の女の人はやめとこうとか言ったじゃない」

豊田「言ったけど」

稲沢「半田さんだって50代だよ、何がダメなの」

豊田「だけどそしたら今度は半田さんを傷つけるよ」

稲沢・設楽「はあ？」

豊田「今日のこと、ずっと楽しみにしてたんですよあの人。それ知ってるから余計に」

設楽「余計に何？」

三好「わかった、ビデオメッセージは？」

稲沢「なるほど、瀬戸さんに、声だけお願いして、今日は、そっちに行けないけど、よろしく願いしますみたいな動画を撮るってのはありかもしれない」

豊田「顔はどうするの」

稲沢「顔はないけど声で雰囲気だけ掴んでもらう」

三好「わかった、外国の人っていう設定にしたらいんじゃないですか。ネットで何喋ってるかわかんない女の人の動画拾ってきて、それを瀬戸さんが日本語でこ
う、通訳みたいな」

瀬戸「え、それ、私、いますか」

三好「え？」

瀬戸「私じゃなくても良くないですか」

稲沢 「字幕でいいよねそれだったら」

三好 「そうか、じゃそれ、俺がやります。字幕作る作業、今から」

豊田 「ちよちよちよちよ、だめ、それもう、全然違う」

稲沢 「何が？」

豊田 「肉体がいるでしょ、それはもう、どうしたって、これは結婚式なんだから」

瀬戸 「肉体・・・」

稲沢 「けどしょうがないじゃん、無いんだから・・・だいたいさあ、なんなの肉体がいるって。気持ち悪いんだけど」

豊田 「はあ？」

稲沢 「なんか独特なんだよね、昭和生まれのその、顔突き合わせてやらなきや駄目だみたいな、いいじゃん遠隔で愛を誓い合えば。オンラインで誓い合うのがトレンドなんだよって半田さんに教えてあげればいいんだよ」

豊田 「いい加減にしろよ」

稲沢 「・・・」

豊田 「なんだよ、さつきから、ずーっと、なんか、言いたいことがあるならはつきり言ってる？」

稲沢 「落ち着いて？」

豊田 「・・・」

稲沢 「落ち着いてよ。ね。みんな、いるんだから」

豊田 「・・・」

三好 「近所の人呼んで来ましょうかやっぱり」

稲沢 「そうしようしようしよう、別に年齢なんてどうだっていいよ、見た目はアレなんでしょ、ちよつとぐらい綺麗にしてるんでしょ」

三好 「あー・・・んーんーんー」

稲沢 「いいよもう見た目が綺麗じゃなくても、結婚したいならもうこのさいなんでもいいじゃない」

設楽 「ねえちょっと、やめようこの話」

豊田 「・・・」

設楽 「ねえ・・・結婚てさ・・・誰かにやってもらうものじゃないじゃない。出会って、相手を好きになって、相手も、自分を好きになってくれて、色々やって、色々あって、それで人生一緒にやっていこうって誓い合うってことでしょうか？それをこんな、適当に相手見繕うみたいなことやつてさあ、なんか、なんかひどいよ・・・」

稲沢 「笑っちゃう何それ」

設楽 「え？」

稲沢 「いや、設楽さんからそんな話が聞けるとは思わなかったから」

設楽 「何？」

稲沢 「いや、じゃなんでこの人とソフトクリーム半分こしてたのかわかって」

瀬戸 「私、やります」

三好 「・・・えっ？」

瀬戸 「なんか・・・はい、半田さんと結婚します」

設楽 「え、何？何を言いだすの急に」

瀬戸 「・・・」

設楽 「瀬戸さん？」

稲沢 「じゃ本人も、了解してくれたことだし、服、どうしようかな、それじゃちょっと地味というか」

瀬戸 「すいませんまさか自分が結婚すると思ってなかったんで・・・」

稲沢、瀬戸が設楽を見る。

設楽 「何」

稲沢 「いや、その服」

設楽 「貸さないよ。・・・何？脱がないからね私、絶対、脱がないから・・・ちょっと、来ないで、豊田くん、助けて、ちょっと、豊田くん！豊田くん！」

